【3】四依法と頭陀行

［0］ただし以上に記したものは、律蔵の規定が整備された以降の、いわば「後期」の仏弟子たちの姿といえるかもしれない。したがってもしこれが僧院に定住するようになって以降の比丘たちの有り様であったとするならば、「最初期」の仏教の修行者は、ジャイナ教の修行者やバラモン教の遍歴期の修行者と同じように遍歴していたという通説への反論にはなっていないということになる。そこで次に、一般的には最初期の仏教の修行者たちの在り方を表していると考えられている四依と頭陀行について考えてみよう。

［1］まず「四依」について調査する。

［1-1］四依（cattāro nissayā）とは、食は乞食、衣は糞掃衣、住は樹下座、薬は陳棄薬に依るべきであるというものであるが、『パーリ律』「大品」（vol. I　p.058）によれば、受戒するときには次のように唱えられるべきであるとされている。

出家生活は乞食による（piṇḍiyālopabhojanaṃ nissayā pabbajjā）。ここにおいてないし命終まで勤めるべし。余得（atirekalābha　それ以外の取得）は僧次食・別請食・請食・行籌食・十五日食・布薩食・月初日食である。

出家生活は糞掃衣による（paṃsukūlacīvaraṃ nissayā pabbajjā）。ここにおいてないし命終まで勤めるべし。余得は亜麻衣・綿衣・野蠶衣・褐衣・麻衣・紵衣である。

出家生活は樹下座による（rukkhamūlasenāsanaṃ nissayā pabbajjā）。ここにおいてないし命終まで勤めるべし。余得は僧院・平覆屋・殿楼・楼房・地窟である。

出家生活は陳棄薬による（pūtimuttabhesajjaṃ nissayā pabbajjā）。ここにおいてないし命終まで勤めるべし。余得は熟酥・生酥・油・蜜・糖である。

ただし『五分律』（大正 22　p.112 下）は「若授具足戒時應先爲説四依。依糞掃衣依乞食依樹下坐依殘棄薬」とするのみであり、また『四分律』（大正 22　p.811 中）は単に「四依」というのみであって「余得」はもちろんのこと細部にはふれないから、「余得」の部分は後に付加されたのであろう。

そこで佐藤密雄博士は、「律蔵にみられる比丘生活は、四依の生活でなく四依の余得とせられるものによる生活であって、原則すなわち四依が例外化し、例外すなわち余得が常態化した生活であった」(1) と評されている。そこで「受具の前後に、糞掃衣等の四依の生活が原則的で、目前に見るような比丘生活は例外余得としてしか認められないと説き聞かせることは、比丘も厳しい出家一般の生活を原則とすべきであるという自覚を持たせることになるのである」(2) というように理解される。したがって最初期の仏教の修行者は四依法的な生活をしていたが、律蔵が整備されて以降の、いわば後期の仏教の修行者は余得が原則となり、時代が下るにつれて堕落したという解釈となる。

筆者は必ずしもそのようには考えないが、しかし「四依」が仏教の出家修行者の本来のあるべき在り方であるとしても、今本稿で主題としている「遍歴」の要素は、ここには含まれていないということを注意しなければならない。乞食も糞掃衣も「遍歴」を前提としたものではないし、「樹下座」も同然であることは後述する。

(1)『原始仏教教団の研究』p.223

（2）同上

［1-2］なおこの「四依」は、提婆達多が破僧に際して要求したとされる「五事（pañca vatthūni）」とかなりの部分で重なる。「五事」の内容については文献によって若干の相違があるので、詳しいことは「モノグラフ」第 11 号に掲載した【論文 11】「提婆達多（Devadatta）の研究」を参照されたいが (1)、『パーリ律』のものを紹介すれば、

①比丘らは一生涯林住すべきであって、村に入る者は罪とする（yāvajīvaṃ āraññakā assu, yo gāmantaṃ osareyya vajjaṃ naṃ phuseyya）。

②比丘らは一生涯乞食すべきであって、請食を受ける者は罪とする（yāvajīvaṃ piṇḍapātikā assu, yo nimantanaṃ sādiyeyya vajjaṃ naṃ phuseyya）。

③比丘らは一生涯糞掃衣を着るべきであって、居士衣を受ける者は罪とする（yāvajīvaṃ paṃsukūlikā assu, yo gahapaticīvaraṃ sādiyeyya vajjaṃ naṃ phuseyya）。

④比丘らは一生涯樹下に住すべきであって、屋内に住すれば罪とする（yāvajīvaṃ rukkhamūlikā assu, yo channaṃ upagaccheyya vajjaṃ naṃ phuseyya）。

⑤一生涯魚肉を食べてはならず、食べる者は罪とする（yāvajīvaṃ macchamaṃsaṃ na khādeyyuṃ, yo macchamaṃsaṃ khādeyya vajjaṃ naṃ phuseyya）。

とされている。このうちの②、③、④が「四依」の乞食・糞掃衣・樹下座と重なるわけである。

そしてこの提婆達多の要求に対する釈尊の答えは、『パーリ律』によれば

①もし欲すれば林住し、もし欲すれば村に住みなさい（yo icchati āraññako hotu, yo icchati gāmante viharatu）。

②もし欲すれば乞食し、もし欲すれば請食を受けなさい。

③もし欲すれば糞掃衣を着、もし欲すれば居士衣を受けなさい。

④私は８ヶ月の間は樹下坐することを許した（aṭṭha māse kho mayā rukkhamūla-senāsanaṃ anuññātaṃ）。

⑤私は不見・不聞・不疑の３つが清浄ならば魚肉を食べることを許した。

というものであった。要するに釈尊の姿勢は、「四依」的なものを規則として強制するのではなく、欲する者が行えばよいというのであった。

ところで頭陀行第一と称えられる摩訶迦葉もこのような生活をしていた者として知られているが、彼は提婆達多とは違って、釈尊から半座を分かたれるほどに一目をおかれ、一般の比丘たちからも尊敬されて第一結集の主催者ともなったことは、「モノグラフ」第９号に掲載した【論文８】「摩訶迦葉（*Mahākassapa*）の研究」において詳しく述べた。

実はこの提婆達多と摩訶迦葉に対する対応の違いにこそ、釈尊の修行観が明確に現れていると解することができる。それは一口でいうならば「中道」ということであって、提婆達多は「五事」を律の規定として、これに反するものは罪とせよという原理主義的な立場をとろうとしたから排斥されたのであり、摩訶迦葉は自分が欲するからこのような生活を行ったまでのことであったから尊敬されたのである。

そして釈尊の中道的世界観・修行観はすでに成道時の悟りの内容の中核にあったのであるから、必ずしも最初期は四依が大原則であったものがだんだん緩やかになったというのでは

なく、初めから余得での生活も認められていたのであるが、仏教が社会的地位を確立し、世間からの信仰を集めるようになるにしたがって、徐々に余得での生活方法が現実的に可能になっていったというように理解すべきではなかろうか。

しかしこれをどのように解するとしても、「四依法」や提婆達多の「五事」の主張の中には「遍歴」の要素は含まれていないことは事実として認めなければならない。

（1）pp.084～085

［2］次に頭陀行を考えてみよう。

［2-1］頭陀行にも若干のヴァリエーションがあるが、パーリ系の頭陀支は十三支であって、阿部慈園氏の『頭陀の研究――パーリ仏教を中心として』（春秋社　2001 年 3 月　pp.023～025）の解説（一部省略）を紹介すると次のようになる。

糞掃衣支：糞掃衣の着用をもっぱらとし、仏教信者から布施された衣を拒絶する支分のこと。

三衣支：三衣とは大衣、上衣、中着衣のことであり、これら三衣のみを着用し、第４番目の衣を受持しないとする支分。ただし略衣としての肩袈裟だけは、第４衣として着用してもよい。

常乞食支：僧伽食・招待食などの 14 種の食物を摂ることを拒否し、もっぱら托鉢乞食のみによって食物を得る支分。

次第乞食支：行乞のときには、至った村（あるいは家）を素通りせず、村の家を順次に行乞する支分。ただし、その村や道路に危険があると判断した場合は、別の村を行乞してもよい。

一坐食支：精舎の食堂や信者の家などで、一座のみの食事をもっぱらとし、多坐食を拒否する支分。食事中あるいは食後、坐を立ったならば、食事のために二度と坐してはならない。

一鉢食支：鉢中にあらかじめ用意された食物だけを摂り、第二杯目つまりおかわりを拒否する支分。

時後不食支：正式の食事の後で、再び食事をしない支分。

阿蘭若住支：人里離れたところを住所とし、村の近くの住所を拒否する支分。ただし、托鉢のために村から近からず遠からずのところが選ばれるべきである。

樹下住支：屋根の下に住することを拒否して、樹の下を住所とする支分。ただし、こうもりの住む樹や空洞のある樹、また精舎の中央の樹などを避け、精舎のかたすみに立つ樹を選ぶべきである。

露地住支：屋根の下と樹木の下をも避けて、常に屋外を住所とする支分。ただし、聴法や布薩のとき、また雨が降ってきたときは一時建物の中に入ってもよい。

塚間住支：塚墓つまり墓所の中やその近くを住所とする支分。

随処住支：住所への貪欲を離れるために、与えられた臥坐具あるいはいかなる住所といえどもいとわず、これを享受する支分。

常坐不臥支：常に趺坐して、横臥することを拒否する支分。

ただしこの解説は紀元後５世紀ころのブッダゴーサ（Buddhaghosa）によって著された

『清浄道論』に基づいたものであって、だから釈尊時代の頭陀支をそのまま表しているわけではないであろうが、いずれにしてもここには「遍歴」の要素がないことは明かである。

［2-2］また頭陀行者と呼ばれる修行者たちもただ独りでの、行方定めぬ、一処不住の「遍歴」は行っていなかったことは、次のような経文から知ることができる。

Vinaya Nissaggiya 015（vol.Ⅲ p.230）：あるとき世尊は舎衛城のジェータ林の給孤独園に住しておられた。その時世尊は「私は３ヶ月間独坐したいから、１人の食事を運ぶ者（piṇḍapātanīhāraka）を除き、誰も私のところに近づいてはならない」といわれた。そこで舎衛城のサンガは「もし世尊に近づいたら波逸提の罪に処す」という規則を作った（katikā katā hoti）。そのときウパセーナ・ヴァンガンタプッタ（Upaseno Vaṅgantaputto）は、衆を率いて（sapariso）世尊のもとに到り、世尊を礼して一方に坐った。客比丘に親しく挨拶するのは諸仏の常法であったから、世尊は挨拶をされ、1人のウパセーナの弟子比丘（saddhivihārika bhikkhu）に「あなたは糞掃衣を喜んで着ているのですか」と尋ねられた。その比丘は「いいえ、喜んで着ているのではありません」と答えた。そこでさらに世尊は「どうしてあなたは糞掃衣者なのですか」と尋ねられた。比丘は「和尚（upajjhāya）が糞掃衣者だからです。だから私も糞掃衣者なのです」と答えた。そこで世尊はウパセーナに「あなたのこの徒衆（parisā）は清らかな心（pāsādikā）をもっている。あなたはどのように徒衆を指導している（vineti）のですか」と尋ねられた。ウパセーナは「具足戒を求める者に、私は阿蘭若住者であり、乞食行者であり、糞掃衣者である。もしあなたも阿蘭若住者であり、乞食行者であり、糞掃衣者でありたいなら具足戒を与えましょう、といいます。もし承知すれば私は具足戒を与え、もし承知しないならば具足戒を与えません。依止を求める者（yo maṃ nissayaṃ yācati）にも同様にしています」と答えた。世尊は善哉善哉と褒められた。

Vinaya「迦絺那衣犍度」（vol. I p.253）：世尊は舎衛城祇樹林給孤獨園に住されていた。そのとき30人のパーテッヤの比丘たち（pāṭheyyakā bhikkhū）は全て阿蘭若に住し、全て乞食を食し、全て糞掃衣を衣とし、全て唯三衣を有していたが(tene kho pana samayena tiṃsamattā pāṭheyyakā bhikkhū sabbe āraññakā sabbe piṇḍapātikā sabbe paṃsukūlikā sabbe tecīvarikā)、舎衛城に往って仏を見たてまつらんとして、舎衛城に到着しない前に雨安居に入る日になったので、途中のサーケータ（Sāketa）において雨安居に入った(1)。

このようにウパセーナが指導する頭陀行者たちも、阿蘭若に住し、糞掃衣を着、三衣者である頭陀行者と見られる比丘たちも、釈尊に会うという目的を持って集団で遊行していたのである。

また頭陀行者として知られる摩訶迦葉も、次のように500人の比丘と遊行していた。

DN. 016 Mahāparinibbāna-s.（大般涅槃経 vol. II p.162）：摩訶迦葉はパーヴァー（Pāvā）からクシナーラー（Kusinārā）に至る道を500人の比丘とともに進んでいた。

そしてこの遊行は、「モノグラフ」第９号に掲載した【論文８】「摩訶迦葉(*Mahākassapa*)の研究」において考察したごとく、釈尊の臨終の地であるクシナーラーに釈尊に会いに行くという目的を持ってなされていたものと考えられる(2)。

以上は頭陀行者と認められる者たちも、他の一般の比丘たちと同様に、集団で、釈尊に会

うという目的を持って遊行していたという資料を紹介したが、次に頭陀行者と認められる阿蘭若住者たちが、集団で定住生活していたとする資料も紹介しておく。

『雑阿含』937（大正 02　p.240 中）：世尊は毘舎離獼猴池重閣講堂に住しておられた。そのとき波梨耶聚落に 40 人の比丘がおり、みな阿練若行、糞掃衣、乞食を修すも未だ離欲していなかった。そこで世尊は無始の生死輪廻を説き、無常・苦・無我説を説いて、皆に解脱を得させられた。

Vinaya「700 結集犍度」（vol. II p.299）：時に、60 人の波利邑の比丘パーテッヤの比丘たち（pāṭheyyakā bhikkhū）があり、全て阿練若者、全て乞食者、全て糞掃衣者、全て三衣者で、全て阿羅漢であった。彼らは Ahogañga 山に集合した。

というようなものである。

また *SN. 014-015*（vol.II p.155）には、舎利弗・目連・阿那律・プンナ・ウパーリ・阿難・提婆達多も、そして頭陀説の者（dhutavāda）である摩訶迦葉もグループを形成し、それぞれ類が和合すると説かれている。なお頭陀行者が集団で生活していたことは、すでに佐々木閑氏が「アランヤにおける比丘の生活」という論文 (3) において指摘されている。

以上のように、頭陀行と遍歴とは関係がなかったから、頭陀行者といわれるような修行者たちも遍歴を行っていたのではなく、他の比丘たちと同様の遊行を行い、また定住もしていたのである。

(1)『四分律』（大正 22　p.877 下）はシチュエーションは若干異なるが、「衆多の糞掃衣を持す比丘」という。他の漢訳律は阿蘭若住者であることには言及しない。

(2) p.063 以下。なお *DN. 016　Mahāparinibbāna-s.* に対応する経典については、p.007 以下参照。

(3)『印仏研究』51-2　p.809

［2-3］ついでに、今の主題の遍歴とは直接の関係がないのであるが、次の資料を紹介しておきたい。

SN. 016-005（vol. II　p.202）：摩訶迦葉は王舎城の竹園に釈尊を訪ねた。釈尊は摩訶迦葉に言われた。「迦葉よ、汝は年老いた（jiṇṇo si tvaṃ）。糞掃衣は重いから家主の衣を着（gahapatāni cīvarāni dhārehi）、請ぜられたるを食し（nimantanāni bhuñjāhi）、我が傍に住せよ（mama santike viharāhi）」と。これに対して迦葉は「私は長い間、阿蘭若に住し、乞食をし、糞掃衣と三衣を着、少欲知足を讃嘆してきました」と答えた。釈尊は「汝は多くの人々の利益のために（bahujanahitāya）行じた」と糞掃衣……乞食……阿蘭若住を讃められた。

これに対応する漢訳は『雑阿含』1141（大正 02　p.301 下）、『別訳雑阿含』116（大正 02　p.416 中）であって、これによって釈尊は摩訶迦葉に頭陀行を捨てることを勧められたことや、釈尊自身は頭陀行的な生活を行われていなかったことが知られる。

［3］以上のように、仏教での厳しい修行とされ、最初期の比丘たちの生活様式であったと考えられている四依法や頭陀行には遍歴の要素は含まれていなかった。したがっていかなる仏教の出家修行者の修行徳目の中にも「遍歴」が入っていたとは考えられない。

そして通説がいうように、もし最初期の仏教の修行者たちが日常的に「遍歴」を行ってい

たとするなら、仏教の修行者も「遍歴修行者（parivrājaka, paribbājaka）と呼ばれてしかるべきであるが、しかし原始仏教聖典では仏教の修行者を自ら「遍歴者」と呼ぶ例は見いだされない。*DN.004 Soṇadaṇḍa-s.*（種徳経　vol. I　p.114）に、「尊敬すべきソーナダンダ婆羅門は年老い（jiṇṇa）年長け（vuddha）高齢（mahallaka）にして、晩年（addhagata）である老衰に達している（vayo anuppatta）。〔これに対し〕沙門ゴータマは幼く（taruṇa）、幼き遍歴者（taruṇa-paribbājaka）である」として釈尊を「遍歴者」と呼び、また *DN.005 Kūṭadanta-s.*（究羅檀頭経　vol. I　p.130）においてもクータダンタ（Kūṭadanta）婆羅門が釈尊を同様に「遍歴者」と呼んでいるが、これはバラモンたちの認識であって仏教徒自身の認識ではない。

そして後に検討するように、原始仏教聖典では‘paribbājaka’は常に外道の宗教者をさす言葉である。仏教系の大学においてインドの仏教史を講ずる際に教科書としてよく用いられる、佐々木教悟・高崎直道・井ノ口泰淳・塚本啓祥共著の『仏教史概説　インド篇』（平楽寺書店　1966 年 11 月）には、「しゃもんとは、この時代の革新的思想家の総称である。かれらは一所不住の遍歴をしながら森林において修行し、村や町へいって教えを説き〔＝遊行〕、説法の報酬として布施された食物によって生活の糧をえた〔＝乞食〕。彼らはその生活の外形によって、遊行者（parivrājaka）、遁世者（saṃnyāsin）、苦行者（yati）、行乞者（bhikṣu　比丘）などと名づけられたが、これらのグループの指導者は、また、しゃもんと尊称されている」と書かれている(1)。文脈からいえば、この後に上げられている「仏教やジャイナ教の開祖」もその１人であったということであろう。

このように通説によれば、釈尊も仏教の修行者も‘parivrājaka’‘saṃnyāsin’‘yati’‘bhikṣu’、そしてしゃもんすなわち‘śramaṇa’と呼ばれていたと理解されている。確かに釈尊も比丘たちも、自らが‘śramaṇa’であり、‘bhikṣu’であるとは自覚していたのであるが、‘parivrājaka’という自覚はなかったといわなければならない。釈尊も「遍歴」する者ではなく、また弟子たちにも「遍歴」を求められず、したがって「遍歴」する者ではなかったのであるから当然である。それは仏教が「苦行」を否定して「中道」を実践すべきであったから、‘yati’という呼称を受け入れなかったのと同様である。

以上のように、釈尊自身も仏教の一般的な出家修行者も、そして頭陀行者と呼ばれる厳しい修行者も、その最初期からいわゆるただ一人での、行方定めぬ一処不住の「遍歴」というものは行わなかったとしなければならない。

（1）p.013